

巻 頭 言

植生史研究会が発足して以来この1年半あまりの間に、第1回植生史研究会シンポジウム（1986年11月）と第6回植生史研究会談話会（1987年4月）を開くことができた。それに加え、昨年8月の本誌創刊号発行につづきここに第2号発行のはこびとなった。こうして着実にスタートできたのは何よりも会員数の増加と層の広がりによるところが大きい。現に会員数は約210名となり、専門領域も古植物はもとより、植物形態・分類、植物生態、地質、地理、考古、人類、土壌と多岐にわたる。特色といえば、植物遺体（化石）を日頃対象とする方々のほかに、現生植物を対象とする方々や人間との関わりに着目する方々の参加が多いことであろう。いよいよ植生史研究会の目指す方向性が浮き彫りになってきた感を受ける。これも会の運営・活動への皆さんの理解と積極的な参加のたまものである。

昨年11月のシンポジウムは忘れがたい、意義のあるものであった。植物園の宿舎に大半が泊まり込むという寒中修行のようであったが、懇親会や2日間の討論は熱気に満ちていた。まさに膝を交えてを地でいったという感がある。こうした形式の研究会に不慣れなためか多少ぎこちなさもあったが、討論の内容は現実性に富み、かつ示唆に富むものが多かった。討論の内容はできるだけ忠実に本誌に盛り込まれているが、編集集中読み返すたびに、本会の存在価値をみる思いがした。時間をかけて基礎的な問題を掘り下げることがいかに大切であるかを痛感した。

シンポジウム2日目の15日早朝、大島三原山噴火騒動が起き、宿舎周辺はその話で持ちきりとなった。さっそく現地へ立たれた方もおられたが、私も実はむずむずしていたのである。火山の活動と植物、あるいは環境や人間との関わりに興味を抱いた方は決して少なくなかったであろう。この噴火騒動を背景として、植生史研究会の広さ、深さに改めて驚いたものである。日本の自然現象の中で、火山とそれに関連する現象は大きな位置を占める。こうした日本の自然に即した植生史研究がもっと積極的に繰り広げられてもいいのにも思ったものである。

さて、研究会が回を重ねるごとに次はどんなことを取り上げてみようかと考えてしまいがちであるが、会を開くたびに問題がより明瞭になり、これからやらなければならないことが山積みされるのが現実である。問題をかたづけただけにはならないのである。提出された問題だけが山積みされ、問題意識だけが過剰となるのはあまり健全なことではない。いろいろなところで問題だけがわいわいはやされるのは決して気分のいいものではない。とくに、植生史研究に直接関わっていない方々が、植生史研究の問題ばかりを声を大にして問題にしておられるのを噂に聞くのはあまり感じのいいものではない。問題意識過剰で評論家ぶるのも決して悪いわけではないが、摘出され明確化されてきた問題には、是非前向きに対処したいものである。討論の成果が、日常の研究の技術論や方法論の開

発に生かされ、報文や論文に具体的に表出してくることを願いたい。そのためにも、日常においても討論の機会がつけられ、さまざまなかたちで問題の掘り下げや実践が展開されることを望むのは私ばかりではないであろう。

なぜこのように述べるかという、今夏の国際第四紀研究連合会議でいささか気になる発言を聞かされたからでもある。8月4日に開かれた後期更新世と完新世の昆虫遺体群集：第四紀古生態と考古学への効用と題する特別セッションでアメリカのアッシュワース氏が、試料を機械に入れると花粉ダイアグラムが出てき、花粉出現率がすぐ気温に読み換えられる様子を図示してスライドで示した。私は一瞬、すぐ的確でうまく表現していると見惚れてしまった。直後、彼は花粉分析の手法による第四紀の古生態研究をさらにと皮肉ってみせた。このセッションを通して、私はその皮肉が二つの部分からなることを感じた。一つは、よくも相変わらず毎度同じ機械的方法で研究をしているなあという呆れである。その中には、おまえさん達、そんなことで本当に当時の気候が読みきれているのかねえ、という意味が含まれている。もう一つは、現状の花粉分析ではいくらやっても発展性がないだろうという、裏を返せば厳しい批判に近いものである。それはそのセッションのすべての講演を聞けば誰も理解できるものである。すなわち、彼らが古生態や気候変化などを最終的には議論しても、必ず現在の分布や生態、形態・分類をしっかりと検討した上で行っているのである。取り上げる種の形態の記載学的説明に費やす時間は多い時で半分以上である。昆虫遺体研究の生物学的基礎に昆虫学があるのだと、いささかあたりまえなことを改めて知らされた。花粉化石研究の生物学的基礎に植物学があるのだと心の中でうなづいたが言葉にならない。

昆虫の生息や分布は植生に大きく関わる。だから植物遺体の研究者と二つ巴で研究すればさぞかし面白いだろうと思ってしまうが、現実はそうでない。どのセッションを通じても、植物遺体の研究発表は、植生図を示したり、気候変動を論ずるのに終始している。多くの場合種が決められているのだが、それはこの地方にはこの種しか分布しないということが根拠になっていることが多い。私は昆虫遺体研究者の皮肉を平気で言わせる空気に落胆した。私のこの話を聞いて、問題意識過剰になるだけではなく、海外に向けてもしっかりしたかたちで問題の掘り下げと実践を示す必要を感じて下されば、異例に巻頭言を2ページにわたって述べた甲斐があったかも知れない。

1987年8月 辻 誠一郎